

『我身にたどる姫君』における『源氏物語』受容の様相

大倉 比呂志

はじめに

『我身にたどる姫君』(以下、『我身』と略す)における『源氏物語』(以下『源氏』と略す)の受容に関して、その特色と考えられる点を述べていきたいと思うが、拙文『我身にたどる姫君』論―同一姫君のすり換えを中心に―(『学苑』第八八八号 二〇一四・10)と一部内容の重なる箇所があることを御断わりしておく。

一

関白と皇后宮との密通によって生まれた我身姫は音羽の山里で尼上(関白北の方の兄である故宮の中納言のもと北の方)に秘密裡に養育されているわけだが、降雪の夜、比叡山からの帰途、関白の息である我身姫の異母兄で、以前から我身姫とは母親を同じくする女三宮を恋慕していた三位中将(後に権中納言・左大将・関白となるが、三位中将の呼称で統一する。母親は故宮の中納言の妹)が訪れ、その後、我身姫の同母兄二宮(後に式部卿宮となるが、二宮の呼称で統一する。巻七で薨去)は、

①この君達(注―三位中将)のいたうまめだちてあだなるところおはせぬを、いと心やましようて、いかで深く思ひつつまむこと見あらはすわざをせむと、(二宮ハ)かげにつき給へれば、ましてたび重なる音羽の里たづね給はざらむやは。(1・上・三三)

とあり、傍線部のごとく三位中将とは対照的にいわば〈あだ人〉として語られているわけだが、音羽を訪れ、我身姫のもとに闖入し、「いと馴れ顔に添ひ臥し」(1・上・三三)たのである。このことを知った皇后宮によって、我身姫は宣旨の里に移居させられ、我身姫の件で懊悩した皇后宮は崩御するわけだが、その遺言により、我身姫は実父関白のもとに引き取られることになる(この時点で、我身姫は対の姫君と呼称され、同一人物のすり換えがなされるが、我身姫の呼称で統一する)。

ところで、我身姫を恋慕する二宮が強引に接近した折、亡き皇后宮の二宮への「思ひ草(注―我身姫)もとの葉むけは知らずとも結ばむ根とはかけずもあらなむ」(3・上・一五三)という夢告の歌により、二宮は自分と我身姫との血縁関係を知り、諦念することになる。

冒頭部からなる我身姫への二人の貴公子の接近は既に指摘があるように、^{注①}

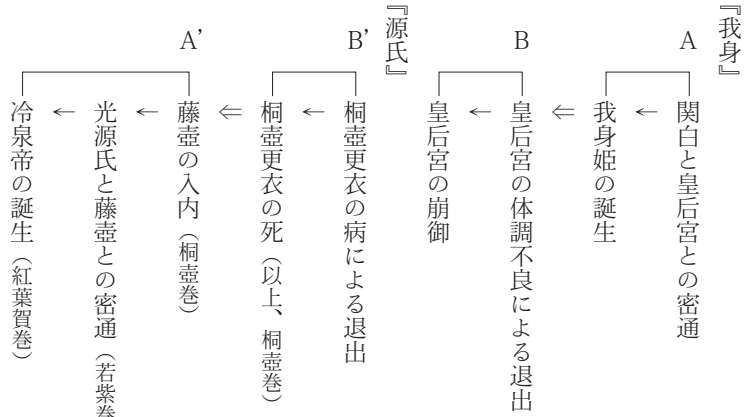
宇治十帖における匂宮と薫による浮舟との情交が想起されてくる。とすれば、「うたて世の人のそしり聞こゆるまであだめきすぎて」(1・上・二二)などと記されている二宮は匂宮に該当し、引用文①の傍線部によって、三位中将は薫の影響を蒙り、我身姫は浮舟に比定されると考えられる。ちなみに浮舟巻では、浮舟から新年の贈り物が中君のもとに届けられ、それに付けられていた手紙から、匂宮はその女が以前接近はしたものの、情交までに至らなかった女性であることを知り、大内記に調査させると、薫が宇治に住まわしている隠し女であることが判明したために、匂宮は薫の声をまねて闖入し、情交を結ぶわけだが、『我身』とは大きな差異を生じている。すなわち、宇治十帖において浮舟は薫と匂宮の二人の男性と情交を結ぶが、『我身』では異母兄と同母兄の二人の兄たちと情交のない点である。「異父・異母であろうと、兄弟姉妹間の婚姻・性的関係は忌避すべきものである」とあって、「現存する中世王朝物語の中では、近親婚・近親相姦の禁忌は破られていない」という指摘^{注②}があるわけだが、ではなぜ『我身』は宇治十帖の話筋を利用して語り始められているのだろうか。周知のごとく、宇治十帖以降の薫と匂宮の動向に照射した『山路の露』や『雲隠六帖』といういわば偽書が存在するように、読者の反響が大きかったために、その仮想的話筋が量産されたのだと考えられる^{注③}。それに対して、『我身』においては二人の貴公子と我身姫との情交なし状態という宇治十帖とは異なった新たな視点からの試みがなされたのではないのか。とすれば、宇治十帖の超絶した人気をうかがうことができよう。それも宇治十帖以降の仮想的話筋ではなく、『我身』では宇治十帖との類似性と差異性という新たな設定がなされたのではなからうか。

さらに冒頭部において、帝(後に水尾院)には多くの后たちがいる中で、

後見のいない皇后宮と関白の妹中宮とがいわば敵対関係となっており、中宮は「はなばなと押し立たせ給へば」(2・上・八六)に表象されるように、押し強い性格で、「いとおし立ちかどかどしきところものしたまふ」(桐壺巻)弘徽殿女御に該当するのに対して、皇后宮は入内時では既に父親が故人で、後見のない桐壺更衣になぞらえられよう。我身姫に異母兄三位中将と、特に同母兄二宮が接近したために、皇后宮がその扱いをめぐる懊悩により崩御した点を踏まえれば、次元は異なるものの、桐壺帝の過剰なまでの寵愛のために他の后たちのいじめによる苦悩が原因で死去した桐壺更衣が想定されてこよう。

そのうえ東宮位に関して、中宮所生の三宮ではなく、「まことの御心ざしのかぎりなくときめかせ給ふ」(1・上・一九)皇后宮腹の一宮が決定したために、「皇后の宮はかぎりなくうれしと思しためり」(1・上・一九)とあるのに対して、桐壺巻では桐壺帝寵愛の光源氏ではなく、第一皇子(後に朱雀帝)が決定したために、「女御(注―弘徽殿女御)も御心落ちぬたまひぬ」と語られている点からすれば、両者とも第一皇子が東宮位に就いている点では同じであるが、后に対する帝寵という点に関しては、両者の間に差異が生じているのである。このように前述したごとく、巻一は宇治十帖における匂宮と薫をめぐるの關係の模倣だけではなく、桐壺巻の桐壺更衣と弘徽殿女御との敵対關係の状況もが取り入れられているのであって、『我身』はいわば二種類に及ぶ二項対立様式に基づいて組成されているといえよう。すなわち、『我身』巻一の話筋は『源氏』の宇治十帖と桐壺巻との影響を色濃く蒙っているのであって、ここに『我身』と『源氏』との關係の特色があるのではなからうか。

巻一における皇后宮の造型は、桐壺更衣が基点となっており、簡単に図式化すると、



のようになるわけだが、『我身』と『源氏』とは、順序が逆になっていると同時に、『源氏』では記事が分散している。『我身』が密通から起筆されている点に注目すると、巻四において三位中将の息である殿の中将(後に権中納言・左大将・左大臣)と二宮の姫宮麗景殿女御、二宮の息である宮の

中将(後に中納言・右大将・右大臣)と女三宮所生の後涼殿女御との二組の密通が同時平行的に語られており、巻一における関白と皇后宮とのそれが大きな意味を担っているものであり、密通が多角的に語られている『いはでしのぶ』や『風に紅葉』との近似性が想定される。

三

そこで『我身』と『源氏』との関わりを具体的に見ていくことにするが、現在のところ、

- ① [A] 徳満澄雄『我身にたどる姫君物語全註解』有精堂 一九八〇・7
- ② [B] 今井源衛・春秋会『我身にたどる姫君』①⑦ 桜楓社 一九八三・4⑤10
- ③ [C] 中世王朝物語全集②④『我が身にたどる姫君』上・下 笠間書院 二〇〇九・11、二〇一〇・7(上は大槻修・大槻福子、下は片岡利博校訂・訳注)

の三種類の注釈書が刊行されており、**[A]****[B]****[C]**の略号を用いることとする。皇后宮の心労による退出に当たって、

① ②上(水尾帝)は、かぎりありて(皇后宮トノ別レヲ)え惜しみはてさせ給はず、御暇許されても、またひきかへし、ただかうながらかぎりの御さまをも見むとのみ、くれまどはせ給ふに、……

③ 憂き世とはかついとほれし身のはてを人(注一水尾帝)のためにも惜しまるるかな

心のうちにぞ(皇后宮ハ)思し続ける。(1・上・四七)

とあり、桐壺更衣の退出の件は、

③ 限りあれば、(桐壺帝ハ桐壺更衣ヲ)さのみもえとどめさせたまはず、御覧じだに送らぬおぼつかなさと言ふ方なく思ほさる。……輦車の宣旨などのたまはせても、また入らせたまひてさらにえゆるさせたまはず。……

かぎりとして別るる道の悲しきにかまほしきは命なりけり(桐壺卷)

と語られており、①と②、③と④、⑤と⑥(ただし、⑥は皇后宮の心内歌、⑦は桐壺更衣の桐壺帝に対する辞世歌の違いあり)が各々見事に対応している。さらに、皇后宮が崩御した件は、

④ 内には、(皇后宮ノ崩御ヲ)聞こし召すまに、籠りおはしましぬれば、よろづ暗き夜の心地して、なべての世いかかは思ひ嘆かざらむ。殿(注一 関白)さへ、「折悪しき御心地悩ましうせさせ給ふ」とて、御歩きもなければ、中宮(注一 関白の妹)のみぞ、いみじかりつる横さまの幸ひ人(注一 皇后宮)、かぎりある世なりと聞き給ふ。(1・上・五二―五三)

とあり、傍線部のごとく、中宮は皇后宮のことを心中思惟を通して酷評している。それは桐壺更衣の死後、

⑤ 風の音、虫の音につけて、(桐壺帝ハ)ものみ悲しう思さるるに、弘徽殿には、久しく上の御局にも参上りたまはず、月のおもしろきに、夜更くるまで御遊びをぞしたまふなる、(桐壺帝ハ)いとすさまじうものしと聞こしめす。(桐壺卷)

という描写と類似しており、皇后宮の敵対者中宮と桐壺更衣の敵対者弘徽殿女御とが、皇后宮と桐壺更衣の死に対していわば快哉を叫んでいる点に特徴があろう。その中宮は娘四宮と兄関白の息である三位中将との結婚を「はなばたと押し立たせ給へば」(2・上・八六)とあると同時に、「女院

(注一もとの中宮)の御心のさがなさも」(4・上・一九一)とも語られている。その性格は弘徽殿女御が「いとおし立ちかどしきところものしたまふ御方」であるとともに、桐壺帝の藤壺への入内要請に対する母后の反応が、

⑥ あな恐ろしや。春宮の女御(注一 弘徽殿女御)のいとさがなくて、桐壺更衣のあらにはかなくもてなされにし例もゆゆしうと思しつみて、……(桐壺卷)

とあり、傍線部のように、藤壺の母后が弘徽殿女御を性悪女であると認識し、恐怖感を抱いたために、娘四宮の入内を躊躇していると語られている。このように中宮と弘徽殿女御は我が強く、性悪女であると烙印が押されており、中宮は弘徽殿女御をもとに造型されているといえよう。また、弘徽殿女御の父親右大臣は「いと急にさがなくおはして」(賢木卷)とあり、中宮の娘女四宮も「ただおしたちはなばなともてなし給へるに」(3・上・一二一)とあって、弘徽殿女御は父親譲り、女四宮は母親譲りと考えられるわけだが、両者に対して負的評価がなされている。その点からも中宮と弘徽殿女御は我が強く性悪女であると語られており、母親から娘へ、父親から娘へとその血筋が遺伝しているという共通点がある。

ところで、病床に臥している皇后宮は見舞いに訪れた関白に対して、

⑦ いかたじけなき御とぶらひに、惜しげなき世ながらもかけとどめまほしう侍るを、むげにかぎりのほどにやと思ふ給へらるる乱りがはしきは、おのづから思し許されなむ。年ごろ深く思う給へ知るふしも侍りつるを、言に出で聞こえさせむに、なかなか浅くなりぬべきに、思ひこめてすぐし侍りつるも、何ごとにかは思ひ知るとも御覧せられむと、思ひ給ふるになむ、かひなき命もいとくちをしう」と、宣旨の君して伝へ聞こえ給ふ。(1・上・四九)

と傍線部に表象されているごとく、謝意が表明されている。さらに皇后宮は続けて関白に、

⑧「かつはかやうにて見聞こえさせするも、誰が御心ざしとは思ふ給へ知らねば、かひなき身の侍らざらむ後を聞こえさせむに、かたはらいたきすぢに侍れど、東宮⑦（後に嵯峨院）の御こと、とり分きてはぐくみ聞こえさせ給へ。世の人に似ぬ御

住まひに侍るめれば、いとど見ゆづる方も侍らぬを」など、すこし言続けて聞こゆる御けはひに、（皇后宮ハ）今宵ぞよろづは思し固めつる。（1・上・五〇）

と傍線部のように、東宮に対する世話を依頼している。それは病に臥した藤壺の発言が、

⑨「院（桐壺院）の御遺言にかなひて、内裏の御後見仕うまつりたまふこと、年⑧ごろ思ひ知りはべること多かれど、何につけてかはその心寄せことなるさまをも漏らしきこえむとのみ、のどかに思ひはべりけるを、いまなむあはれに口惜しく」とほのかにのたまはするも（光源氏ニotte）ほのぼの聞こゆるに、御答へも聞こえやりたまはず泣きたまふさまいといみじ。（薄雲巻）

とあるごとく、光源氏への謝意がこめられており、上掲⑦の①は⑨の②の影響を蒙っていることになる（B③の注に指摘あり）。また、⑧の④には東宮への世話が依頼されているわけだが（C④の注に指摘あり）、⑨の①で光源氏が桐壺院の遺言に従って、冷泉帝の世話をしていることに対する藤壺の謝意②が続けて語られている。一方、『我身』においては謝意と東宮への後見依頼が分断されて語られている点に注意すべきだろう。ともに密通相手手前にして死にゆく者の発言が語られているが、『源氏』との差異を顕在化するために、意図的に分断した語り方がなされたのではなからうか。

謝意と東宮に対する後見依頼が密接に連繫している『源氏』に対して、『我身』においては分断することによって皇后宮の関白への比較的長い発言が語られようとしたのではないのか。すなわち、臨終を前にして皇后宮と関白との対面が哀感あふれるように企図されたと考えられる。その皇后宮崩御の場面は、

⑩「乱り心地むげにかぎりになり侍りぬるを、いともかたはらいたう」と（皇后宮ハ関白ニ）聞こえ給ふ。ほどもなく消え入るやうにおはしませば、東宮・宮々⑪（二宮・女三宮。東宮も含めて三人は水尾帝と皇后宮との子）思しまどふさまなめならむやは。げに露のやうにて消えはてさせ給ひぬれば、あるかぎり心をさまる人もなし。大臣（関白）は空を歩む心地しながら、つれなく御車には奉りぬれど、すべてうつつのこととも思されず、……（1・上・五一）

とあるが、紫上死去の前後の件では、

⑪「今は渡らせたまひね。乱り心地いと苦しくなりはべりぬ。言ふかひなくなりけるほどといひながら、いとなめげにはべりや」とて、御几帳ひき寄せて（紫上ガ）臥したまへるさまの、常よりもいと頼もしげなく見えたまへば、「いかに思さるるにか」とて、宮（明石中宮）は（紫上ノ）御手をとらへたてまつりて、泣く泣く見たてまつりたまふに、まことに消えゆく露の心地して限り見え給へば、……（光源氏ハ紫上ノ葬送ニ出カケタトコロ）空を歩む心地して、人にかかりてぞおはしましけるを、……（御法巻）

と語られている。上掲⑩の②は見舞いに訪れた明石中宮への紫上の発言であり、③は紫上を見つめる光源氏の視線であって、④は葬送に赴く光源氏の茫然自失した様子が語られている。それらは『我身』における⑩の④

(C)の注に指摘あり) ㉗ (B)Cの注に指摘あり) ㉘ (A)B)Cの注に指摘あり)に各々対応していると考えられる。

とすれば、皇后宮崩御前後の記事は、桐壺更衣・藤壺・紫上の死に関わるそれが利用されており、三人の女性たちはすべて光源氏に関わっている人物であるが、光源氏にとっては母親である桐壺更衣の死に至る直前の状況が語られている点を考えると、それが我身姫の母親である皇后宮の崩御直前の描写に影響を与えていると思われる。さらに、光源氏に該当する人物として皇后宮の密通相手である関白が想定され、その関白が皇后宮の崩御が語られる場面に登場するのは、薄雲巻における藤壺崩御の場面に光源氏が登場する件の影響を蒙っていると考えられる。そのうえ前述したごとく、光源氏にとって最愛の紫上の死の前後が語られている御法巻が皇后宮の崩御の場面で三個所にわたって引用されていることからしても、関白にとって皇后宮が最愛の人であったことの証明であると理解されよう。

以上のように、光源氏と我身姫とを冒頭部に登場させている点はもちろんのこと、両者の母親もまた冒頭部で語られていることの意味は大きい。というのは、光源氏並びに我身姫が起点となってその血脈が語られていくという点からも、長編化の傾向の可能性が暗示されており、『我身』が『源氏』の影響を蒙っていると考えられるからだ。とすれば、光源氏と我身姫の今後の行方を決定する存在として登場させられたのが、桐壺更衣と皇后宮であったのだ。

四

巻三の冒頭部で中宮は娘の女四宮と三位中将との結婚を是非とも実現すべく、三位中将の父親関白に強硬な申し入れをした後、三位中将と女三宮

との度重なる情交が語られている。少々長い引用となるものの、その件は、

⑫(三位中将ガ)ただかひなきこと(注一女三宮との逢瀬を希望すること)を中納言の君(注一女三宮付きの女房)に書き尽くし給へば、責められわびて、またいとおぼつかなき夕闇の空にまぎらはし(三位中将ヲ女三宮ノモトニ)入れてけり。……^⑬心地のいなやましきを、いとからずはなむ」とばかり、(女三宮ノ)からうして一言聞きつけぬる御けはひは、(三位中将ニトツテ)またとり返し心まどひぞ限り知らぬや。……よし、(女三宮カヲ)かばかり心づきなきものに思しとられにける身なれば、ましてとどまらむ名やは惜しけきと(三位中将ハ)思ひはて給へるに、(女三宮ガ)いとどめづらかにいみじと思しまどへるさま、いかがはなのめならむ。(三位中将ノ)おしたち心憂き御心のほどを、我が御契りゆゆしうのみ思ひ出でられ給ふに、まことに岩木になりても、ただかうめざましき目は見じと(女三宮ハ)思ひとり給へるに、単の御衣ばかりにまつはれて、御帳の外にまろび出で給ふを、……

(三位中将ノ歌)

変はりぬるつらさを憂しと恨みてもなほ移り香のなつかしきかな^⑭

心にもあらずまろび出で給ひぬる(女三宮ノ)御髪の、床の金物にひかれたりけるを、手に当たりつるばかりに心を慰めて、(三位中将ガ)形見に馴らし給ふもはかなしや。(3・上・一一二―一一五)

とあるわけだが、傍線部⑬⑭⑮までに關して、各々『源氏』からの影響が指摘されている。

⑬「心地のいなやましきを、かからぬをりもあらば聞こえてむ」と(藤壺ハ)のたまへど、(光源氏ハ藤壺ヘノ)尽きせぬ御心のほどを言ひつづけ給ふ。(賢

木卷。[A][C]の注に指摘あり)

- ⑱—(螢兵部卿宮ハ) 御土器のついでにいみじうもて悩みたまうて、「思ふ心(注一玉髪への恋着) はべらずは、まかり逃げはべりなまし。いとたへがたしや」と(光源氏ノ勸メル盃ヲ) すまひたまふ。

(螢兵部卿宮ノ歌)

むらさきのゆゑに心をしめられたればふちに身なげん名やはをしけき(胡蝶卷。[B][C]の注に指摘あり)

- ⑲—若き人(注一軒端萩)は何心なくいとようまどろみたるべし。(光源氏ノ) かけるはひのいとかうばしくうち匂ふに、(空蟬ハ) 顔をもたげたるに、ひとへうちかけたる几帳の隙間に、暗けれど、うちみじろき寄るけはひいとるし。(空蟬ハ) あさましくおぼえて、ともかくも思ひ分かれず、やをら起き出でて、生絹なる単衣をひとつ着てすべり出でにけり。(空蟬卷。[A][B][C]の注に指摘あり)
- ⑳—(光源氏ハ) しばしうち休みたまへど、寝られたまはず。御硯いそぎ召して、さしはへたる御文にはあらで、畳紙に手習のやうに書きすさびたまふ。

(光源氏ノ歌)

空蟬の身をかへてける木のもとになほ人がらのなつかしきかな

と書きたまへるを(空蟬ノ弟デアル小君ガ) 懐に入れて持たり。(空蟬卷。[B][C]の注に指摘あり)

- ㉑—かの人(注一軒端萩)も(光源氏カラノ後朝ノ文ガナイノデ) いかにも思ふらんと(光源氏ハ) いとほしけれど、かたがた(光源氏ハ) 思しかへして御ことつけもなし。(空蟬ノ) かの薄衣は小桂のいとなつかしき人香に染めるを、(光源氏ハ) 身近く馴らして見るたまへり。(空蟬卷。[B][C]の注に指摘あり)

ここで注目しておかなければならないのは、近接した三例の個所に、光

源氏の闖入を察知し、軒端萩を残して逃げていった空蟬の状況が引用されている点である。語り手は度重なる三位中将との情交を拒否する女三宮が、三位中将から逃れようとして侍女を呼ぼうとする姿勢に、空蟬を重ね合わせようとして、空蟬卷の三例を集中的に引用しているのだ。このように『源氏』の集中的引用がなされているのも、『我身』の表現上の特色のひとつであると考えられる。

五

水尾院(注一皇后宮の夫)は出家を希望しており、娘女三宮が「入る山道の絆」(3・上・二七)になるために、三位中将の父関白に女三宮との結婚を要請したところ、関白は息子が女三宮に恋慕しているのではないかと疑念を抱きながらも、結局、承諾する。とすれば、水尾院の出家願望と娘の結婚の問題は連動しているのである。それは『源氏』若菜上巻において、朱雀院が出家するために、娘女三宮を光源氏に託そうとしたところ、最初は断わられるものの、再度の要請で承認を取り付けたという点では、『我身』の関白が一回で承認したのとは異なっているわけだが、根底では『源氏』の影響を蒙っているといえよう。

ところで、父親と息子がひとりの女性を共有する例としては、桐壺帝と息子光源氏が藤壺を秘密裡に共有したことが、『源氏』に語られている。『我身』において、我身姫の面影を忘れられない三位中将はその面影を宿す女三宮(我身姫とは異父同母姉妹)を恋慕し、情交に至るといふ点から考えると、『源氏』の場合は、藤壺の最初の男は父親の桐壺帝だが、『我身』では女三宮の最初の男は息子の三位中将であって、『源氏』とは逆構成となっている。そればかりではなく、桐壺帝が藤壺と光源氏との密通を承知

していたという記述はなく、関白は息子が女三宮を恋慕しているのではないかと薄々察知しながらも、「異人（注―故皇后宮）と聞こゆべきにもあらぬ（女三宮ノ）御さま・かたち・御声・けしき」であるがゆえに、「時の間も隔てむはいと堪へがたうのみ思しなるままに」なっていく状況に埋没していく。だからこそ、「子ながらあやまちしたる心地ぞし給ふ」（以上、3・上・一二九）と語られているように、関白は息子に負い目を感じているのであって、『源氏』との差異が語られている。

そこで、女三宮が関白の思い人皇后宮の娘である点に注目すると、そこに藤壺との関わりが見えてくるのではなからうか。というのは、水尾院の鐘愛する女三宮が皇后宮の娘であるからこそ、関白は女三宮との結婚を受け入れたと考えられるわけだが、それが母子相姦になることへの懸念は語られてはいない。『源氏』の場合には、夕顔と情交を結んだ光源氏はその娘玉鬘との情交の可能性があったにもかかわらず、母子相姦になる寸前で思いとどまったのであって、その点においても『我身』と『源氏』との差異を見ることができないのではないのか。

さらに、光源氏と関白の結婚相手が各々藤壺と皇后宮の血縁者であった点を無視してはなるまい。光源氏が父桐壺帝の寵妃藤壺を奪うのとは次元を異にしているものの、女三宮が息子の恋慕の対象であったことを薄々知りながらも、父関白は女三宮を奪ったのだ。その^{注④}「女三宮」は、『源氏』では光源氏と柏木の二人の男と情交を結び、『我身』においては関白父子と情交を結んでいる点から、各々二人の男たちとの間で情交を持ったという記号なのであって、そこに〈女三宮〉という呼称の隠された意味が内在化されているのではなからうか。

おわりに

『我身』における『源氏』受容の特色は、「二」と「五」で述べたように、『源氏』に対して二度にわたる逆構成の様相を呈していると同時に、「四」で触れたごとく、『源氏』の集中的引用がなされている点にあると考えられる。

* * *

『我身にたどる姫君』の本文は、中世王朝物語全集により、算用数字は巻、上・下は分冊記号、漢数字は該当ページを示し、『源氏物語』は新編日本古典文学全集によるが、私に表記の一部を改めた箇所がある。

注① 金光桂子「破局を避ける物語―先行物語の利用に見る『我身にたどる姫君』の一特徴―」（『人文研究』〈大阪市立大学大学院文学研究科紀要〉第五十四巻第四分冊 二〇〇三・三）は、「物語の冒頭から不義の子自身が出生を怪しみ思い悩むという点において、『我身』は『源氏』第三部を直接に受けている」として、薫の影響を指摘している。

② 宮崎裕子「姉妹への恋」（『国語と国文学』二〇〇六・一）。

③ この点に関しては、大倉『物語文学集攷―平安後期から中世へ―』（新典社 二〇一三・二）第二部「二十」で触れておいた。

④ 女三宮と記述する場合には、『源氏』と『我身』にそれぞれ登場する人物としての女三宮を表わし、〈女三宮〉とした場合には、女三宮ということばに内在化されている意味―二人の男との情交―を呈示するものと考えて区別した。